

| | |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 十九世紀イギリス実証主義運動に関する一考察 |
| Sub Title | |
| Author | 森, 淳子 |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1969 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.126(624)- 126(624) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 研究発表要旨 彙報 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0130 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。本論文ではこのトマ発生論争の一端を紹介する。

十九世紀イギリス実証主義運動に関する一考察

森 淳子

フランスでの実証主義は、十九世紀のなかば頃からイギリスにひらめつたが、この頃で大きな役割を果たした John Stuart Mill の思想（一八〇六—一八七二）を Auguste Comte (一七九八—一八五七) とのかかわり合いかへ述べ、更にそのもととしてイギリスに入つてあた実証主義の思想と運動、特に Oxford の Wadham College における Richard Congreve, (一七八一—一八九九) E. S. Beesly (一八三一—一九一四), J. H. Bridges (一八三一—一九〇六), F. Garrison (一八三一—一九一三) (彼の殆どは、宗教的には evangelical の要素を強くもつものであるが) 等を中心としたイギリス実証主義の運動を、一八六〇・七〇年代イギリスの社会的・政治的な動きとの関連から考察したのである。

彼等が主張する問題に關しては、井戸戸、Fortnightly Review 及び彼等の雑誌 Positivist Review のなかの論文等を参考した。

ピューリタニズムの起源

—P. J. テリネリュールの見解をめぐつて—

上山 雄治

ピューリタニズムの本質と起源についての伝統的な解釈は、メリー治下に迫害された英國のプロテスタントたちが大陸に亡命し、ジエネーヴのカルヴァンによる改革の成果を見、エリザベス登位と共に帰国した時それにならつたもので、本質的にはカルヴァニズム特にその中核にある「预定説」こそピューリタニズムを特色づけるとする。

それに対し重要な反論が試みられた。マローミック神学校の教會史学者 L. J. トリネリードはペリー・ミラーに示唆を得てピューリタニズムの神学の本質は「契約神学」であるとし、その系譜をたどねるにより起源をきわめ得るとした。文献的にはウイリアム・ティンダルが最初だが、これはもとより英國土着のもので世俗的にはコモンロー、宗教的には「オーガスチニアニズム」の伝統の中に存していた。もし神学的な関連を大陸に求めるならそれはライシランの改革派の神学である。彼はこの見解を The Origins of Puritanism, Church History XX, The American Society of Church History, 1951 で発表した。

彼はピューリタニズムの英国土着性と、大陸との関係においてカルヴァンと断絶するところの一重の仕方で通説を否認しているが既に有力な学説となつてゐる。彼のこうした見解を最初に我が国に紹介したのは東神大の大木英夫氏で同大学神学会編『神學』XXIII, XXV (1963), XXVI (1964) で「ピューリタンの契約神學」として発表された。

本論文はトリネリュールの論述の紹介と批判であり、大木英夫